

論文内容の要旨

| | | | |
|---|-------------------|----|-------|
| 専攻名 | 経営意思決定 専攻 | 氏名 | 末永 統大 |
| 題名 | 現代企業会計としての減損会計の特徴 | | |
| <p>論文内容の要旨</p> <p>本論文は、わが国における減損会計制度をアメリカ基準及び国際会計基準との比較を通じて、現代企業会計の特徴を抽出しようと試みた。</p> <p>従来（国際会計基準とのコンバージェンスが叫ばれるまで）、わが国の会計制度は、取得原価主義会計を中心とし、費用および資産の測定は原則として取得原価であった。これに対して、固定資産の減損会計とは、資産の収益性の低下により投資額の回収が見込めなくなった状態であり、減損処理とはそのような場合に一定の条件の下で回収可能性を反映させるように当該資産の帳簿価額を減額する会計処理である。その意味で、資産の収益性の上昇は考慮しない非対象の会計制度といえるのである。</p> <p>そこで、固定資産の減損会計に係わる理論的構造は、どのような論理に依拠するのか、また、従来より、わが国の会計制度に存在する減価償却や臨時償却及び臨時損失と減損処理とはどのような関係にあるのか、さらにわが国の減損会計の「意見書」の基本とする「投資期間全体を通じた投資額の回収可能性」という基本理念と「減損会計基準」における会計処理の基底にある「将来の稼得しうる投資の成果」のみを考慮するという会計理論とについて検討した。検討するに至った理由は、減損会計は、わが国において「使用価値」や「回収可能価額」という新たな会計概念の具体的な会計基準への適用の先駆けとなった会計基準であり、かかる会計理論を考察することは、現行の会計制度を理解する上でも有益であると考えたからである。</p> <p>しかしながら、減損会計の研究の成果は、理論研究や実証研究の分野で多数存在し、研究の余地はあまりないようにも思われるが、そのほとんどが、減損会計の認識と評価に関わる研究であるといつてよい。本論文における研究は、減損会計の入り口である「資産のグルーピング」と「減損の兆候テスト」の重要性に着目して、経営者の裁量的会計行動という視点を導入することで、分析を進めた。</p> <p>以上のような研究を行ったが、目的とするところは、いわば、情報提供機能と利害調整機能との相違がどのように会計制度に現れているかを明らかにすることで、現代企業会計の特質を減損会計を用いて表現することにある。</p> <p>先ず第1章において、わが国における減損会計の概要とその特徴を考察する。その際、わが国の減損会計基準導入の経緯やその背景を考察すると共に、「意見書」及び「減損会</p> | | | |

| | |
|--|-------|
| 氏名 | 末永 統大 |
| <p>計基準」を検討することによって、取得原価主義会計の枠組みの中でのわが国における減損会計の会計理論を明らかにする。</p> <p>第2章では、国際的な固定資産の減損会計基準の論理を検討する。具体的には、わが国の減損会計基準導入以前から会計基準として制定されたアメリカ減損会計基準と国際会計基準の概要を比較・考察することによって、両者の減損会計基準における会計処理および会計理論の特徴を明らかにしている。その際、第1章で明らかとなったわが国の減損会計における会計処理及び会計理論との比較・検討を行い、わが国の減損会計の特徴を浮き彫りにすると共に、各々の減損会計基準における異同点を考察している。</p> <p>第3章では、企業価値を測定し投資家への情報提供機能を優先的に考える現代企業会計の特徴を明確にするため、反対に利害調整機能をもって課税所得を算定している法人税法の規定をみることで減損に対する取扱いの相違を明らかにした上で、依存する会計基盤の相違を明確にしている。</p> <p>第4章では、わが国における減損会計の実証分析を行っている。減損会計の適用実態と企業業績との関連性を検討することで、情報提供機能として減損会計がもたらす効果や機能を明らかにしている。具体的には、経営者の裁量が最も作用する資産のグルーピングについて、グルーピングの設定の仕方と減損の兆候をいかに関連づけて認識するかに焦点を当てて検討している。</p> <p>第5章では、本論文のまとめとして、現代企業会計の特徴としての減損会計について、その中心となる目的、機能および本質について私見を述べている。つまり、減損会計が持っている減損テストの重要性、報告会計としての位置づけ、本来有する機能および会計的本質等々を明らかにするものである。</p> <p>以上の研究により、①減損会計は、経営者の判断を重視する投資意思決定会計であって、投資の失敗を合理化する会計であること、②将来キャッシュ・フローに代表されるように結果の会計から予測の会計に変化させた会計であることの2点を特に強調したい。</p> | |